

市民広聴会「まちづくりほっとミーティング(令和2年度第2回)」 会議録(概要)

<テーマ>考えよう、避難所生活

日時	令和3年3月21日(日)10時~11時30分
会場	西部地域交流センター・やはぎかん(矢作町)
出席者	参加者(公募)8名、市長

1. 市長あいさつ・広聴会の趣旨説明【市長】

- ・私は市民参加型の行政を推進していきたい。
- ・市民の皆さまから現場の切実な声をお聞きして、それを行政政策に活かしていきたいという思いで、まず第1回目は昨年12月にトイレというテーマで実施した。
- ・今日は避難所の在り方について考える。

2. 今回のテーマについての説明【市長】

- ・トイレと避難所には共通するところがある。避難所生活におけるトイレの重要性も、皆さま方はよくご理解・ご認識いただいていると思う。
- ・自然災害は今この瞬間にも起きるかもしれない。だから、常日頃から避難所の在り方については意識を高めておかなければならない。
- ・3月11日に東日本大震災から10年の節目を迎えたが、これは終わった災害ではない。特に福島第一原発事故からの避難者は苦しい状況が続いている、まさに現在進行中の災害であると、改めて思い起こしているところである。
- ・地震や水害・台風では、それぞれ避難所の在り方が微妙に異なってくると思う。避難所に行くときの状況は、どういふときなのか改めて皆さんと一緒に確認をしておきたい。
- ・市民の皆さま方は、避難所は安心・安全・快適なものであってほしいと考えていると思う。難を避ける避難所で、また新たな困難(不衛生なトイレ・プライバシーの侵害・ペットの問題・感染症)に直面してしまうことは、行政として事前に配慮して避けなければいけない。
- ・岡崎市の行政は防災担当を中心に避難所ができるかぎり市民の皆さま方にとって安心な場所であるように努めているが、まだ目の行き届かないところがあるかもしれない。きめ細かく丁寧に避難所の在り方を構築していきたいという思いで、今日はご参加の皆さま方から避難所の在り方、災害が起きたときの避難の在り方をお聞きできればと思う。

3. 参加者のテーマに関する意見表明

【参加者A】

・若松町から来た。私は各家庭の避難場所がどこであるか再確認しておくことが重要だと思う。私の場合、広域の避難場所は南公園、一時的避難場所は岡崎小学校グラウンドである。避難所では、例えば、飲料水・服・携帯電話・懐中電灯が必需品だ。日頃からのチェックおよび準備をして臨みたいと思っている。

【参加者B】

・実家は岡崎市中心部にある。私は2011年3月11日に福島県いわき市に夫と3人の子どもの5人で暮らしていた。そのときの被災体験から、避難所についてご意見を申し上げたくて参加した。

・私自身は災害の際に物資を用意していたが、避難所の様子を見ると難を逃れるような場所

ではなかった。岡崎市の市民一人一人の支援を少ない職員さんで全て賄うのは無理な話だ。だから、まずは自宅を避難所として安全に過ごせる場所にするのが、最初にできる防災ではないかと思う。

【参加者C】

・東日本大震災以降、熊本地震や西日本豪雨の災害ボランティアをやってきた。被災者と接した経験から、本日のテーマである避難所について大きな課題が山積みだと思う。避難所は地獄のようなところなので、私も行きたくないと思いつつ準備をしている。

・課題を解決するのは大変だが、私は幾つかのアイデアを持っている。今日は時間が取れないかもしれないが、市長に直接お伝えしたり、アドバイザーを集めたミーティングを開催したりするのはどうか。

【参加者D】

・岡崎肢体不自由児・者父母の会をやっている。日頃は車いすやバギーの方たちを家族に持って生活している。「災害のときに子どもたちをどうするのか」と聞くと、「子どもと一緒にどうとでもなる」という発言を多く聞く。

・実際にこの避難所に来たことがあるが、既にコロナ禍で担当に何人ぐらい入れるかと聞くと7~8組だというお話をされた。早い者勝ちかと聞くと、そうですねと。われわれは避難準備情報で行かないと間に合わないと感じた。

・普通に食事が取れない子たちが大勢いる。防災備蓄倉庫を見て、唯一その子たちが食べられるのは赤ちゃん用のミルク缶やおかゆ。

・岡崎市には要支援者の名簿がある。しかし、登録した後これを活用できる体制はない。災害時には要支援計画を作らなければいけないが、なかなかできていない。今日は、そういったことをお聞きしたく、またお伝えしたく参加した。

【参加者E】

・守ろう子どもと赤ちゃんというママ防災の団体を立ち上げている。今日の参加者に子連れのママは一人もいない。避難所に来たときに子どもは泣いたり叫んだり走り回ることを考えると、連れていくのが非常に心苦しい。避難所に行くことが最初のハードルになってしまう。

・熊本地震を経験された方は、避難所の中には連れていけないから車中泊だった。でも走り回らせたいからどうしようと、お話をされていた方がたくさんいた。

・私たちは活動して5年目だが、毎回来てくださるママに聞くと、父親が警察官だから災害が発生したら子ども2人を連れてどうにしか生き延びなければいけないと言った。他にも、父親が絶対に家に帰ってこられない仕事をしているママがたくさんいらっしゃる。

・ママが安心・安全・快適にパパの帰りを待てる場所をつくってあげないと、一人で自宅避難するのは不安で仕方がない。親子のシェルターになる場所を、これからは考えていただきたい。

・高校生の娘は、うちの家を避難所にしたらいいと言ってくれた。そう考える大きくなった子どもたちもいるので、防災教育をして育てていくのも大事だ。ママたち目線も組み込んで考えていただけると嬉しい。

【参加者F】

・23年前に夫が大腸がんで入院して生死をさまよっているときに、婦人自主防災クラブで会長を務めた。その際、消防職員・救命士から、人の命を守るために止血・応急手当の重要さをいろいろ教えてもらい勉強した。

・夫は11カ月で職場復帰したが、今年、心筋梗塞で入院して食べるものに制限ができた。避難所の備蓄倉庫にあるものを研究したい。

・避難所に女性や子どもたちの部屋をつくろうと話をしたところ、部屋をつくるからみんなやっていこうという学区の総代と実行委員が増えてきた。だから、声を上げていくことは非常に良いと思っている。

・コロナ禍の避難所開設に参加した。大きい地震では怪我をした多数の人が避難してくることを想定しながら、安心・安全・居心地のいい避難所を目指したい。

【参加者G】

・私は防災士として、BCPプランナー、ボランティアコーディネーター、被災した外国人の通訳（フランス語）をしている。実務家としても、水害や地震で使えなくなった自動車の廃

車手続きを被災者に代わって行っている。さらに市の行政機関に代わって、罹災証明発行の手続きをお手伝いしている。被災した皆さんが普通の生活に戻るためのお手伝いをする立場である。

・今日は非常に実務に詳しい方のお話が聞けると思うので、新しい気付きがあることを期待している。

【参加者H】

・私は夫とネコ3匹で暮らしている。3.11（東日本大震災）では動物と避難ができず外や車の中で過ごしたとか、動物を置いてきてしまっって迎えに行けないという意見が目に残った。

・岡崎市のホームページには、動物と暮らす方々へ向けた避難方法や避難場所の明記がなくて不安になった。ボランティアさん頼りではなく、岡崎市として一緒に場所づくりや獣医師とのネットワークを密にして、動物と暮らす市民を対象とした避難訓練をイベントとして行っていただけると大変嬉しく思う。

4. 意見交換

【避難所の実態について】

市長

・避難所が地獄のようなところであるという実態、ご体験を教えてください。

【参加者B】

・3.11（東日本大震災）当時、市の職員さんも地震は起きないとおっしゃっているぐらい、皆さん何も準備していなかった。岡崎市に来てからも幾つかの小中学校で備蓄倉庫を見せていただいたが、通っている生徒の分もなければ、3日間も持たない程度しかない。まず物が来るまでどうしようもない。

・自分が持ってきた物しかない体育館に、ただじっとしているしかない。でも揺れ続ける。そんな中で落ち着いては寝られない。福島は原発事故の関係もあり支援物資が届かず、そうなる自分の物で何とかするしかない。

・避難所に行けば何か物があると思うのではなく、まず自分で準備をする。そこから困っている人たちを助けようという次のステップに行ける。

【参加者C】

・みんなに認識してほしいくて地獄という言葉を使った。普段は距離を取った自宅で生活している人たちが、みんな1カ所に集まれば大変なことになるので、事前に避難しなくてもいい準備をする。

・避難所は集まった人だけで運営していくことになる。いろいろな方がいるので人が怖くなると思う。だから、極力人を少なくすることが大事だと思う。

・どうしても自宅で生活できない方に限って避難して人を最小限にすることで、課題は小さくなると思う。それを市民の方が認識することが大事である。避難しない準備・訓練に切り替えていきたい。

【高齢者・身体障がい者にとっての避難所】

市長

・避難所に行かなくても済むように自宅での備えを強化しておくべきだというご意見が出た。例えば、高齢者や身体障がい者の方にとっては自宅にとどまるほうがいいのか、避難所に行ったほうが安心か。

【参加者A】

・基本的には避難所に行くのがいいかと思うが、その家庭ごとの事情がある。1人の場合はいかざるを得ないかもしれないが、家族がカバーすれば家で様子を見て臨機応変に動く方法もある。家族の状況を見て、ケース・バイ・ケースになると思う。

【参加者D】

・障がい者の場合は物理的に避難所に行けない方がたくさんいる。私の避難所は矢作東小学校だが、体育館は階段なので物理的に車いすは入れないしトイレは昔ながらの和式で到底使えない。まず自助努力をするように会（岡崎肢体不自由児・者父母の会）の方たちにはお話ししている。

・それでも、頼らなければいけないことについて、備蓄品についてはより柔らかいものを準備してほしい、褥瘡^{じょくそう}防止のためにエアマットが必要だとアピールする。

・福祉避難所は2週間から半月ほど先で、すぐ開設されない。じゃあどうするかと、そこで止まる。障がいの軽い・重いがあるので、重たい子にとってはすぐに病院に行けば入院する体制はできているが、そこまで行くのはどうするのか。

・自分たちでは何ともならないので、共助というより「^{きんじよ}近助」と言ったほうがいいのかと思うが、自宅の周りに助けてくれる人たちをより多くつくっておくほうが現実的だ。

【避難所に行くメリット】

市長

・大規模地震などで自宅が倒壊してしまい自宅にとどまれない状況が生じたとき、避難所に行かざるを得ない。避難所は快適ではないが、メリットがあれば教えていただきたい。

【参加者B】

・まず給水車は小学校・中学校など避難所に来る。ただ、すごい行列であった。

・支援物資が届くのも、自衛隊が救助に駆け付けるのも避難所だ。だから、避難所は人の手や情報や物が集まる場所としてあるべきだ。

【参加者C】

・家で生活できなくなったら避難所へ行く。生きるためには、それしか方法がない。極力行かない準備をする。でも、どうしても行かなければいけない人は行く。だから、避難所

はもちろん必要であるし、少しでも不自由しない安心して行ける場所であってほしい。

【自宅避難所と避難所の連携】

市長

・小さい子どもと一緒に避難生活を送るために自宅を開放していいというご提案は、とても素晴らしいことだ。そのようなご家庭の登録制度を作ってみると面白い。一つ課題になるのは支援物資や情報をうまく確保するのだが、避難所との連携についてアイデアはあるか。

【参加者E】

・企業が避難所として一つのフロアを提供して、市と連携して備蓄品やメンテナンスの助成を受けられるという仕組みがあった。

・矢作北学区には小学校・中学校しか避難所がなく、人口に対して場所が少ない。企業・保育園・幼稚園はあるので、そういうところも使っていきたい。コロナの影響もあるので、細かく分散できるようなところがあればいい。家を開放する場合は、知り合いのママ友たちが一緒にいれば、お互い連携を取って見ていただける。

・大体は総代に聞くように言われるが、総代は1年で替わっていく。行政としてフォロー制度を作るのであれば、きちんと管理して連絡をするなど情報の伝達手段を訓練していくことが必要だと思う。

【乳幼児やペットを抱えた家庭にとっての避難所】

市長

・乳幼児を抱えるご家族にとって、避難所は居づらいものか。

【参加者E】

・避難所に行くとき常に泣いちゃ駄目、騒いじゃ駄目、走っちゃ駄目と全て駄目と言うしかないで、子どもも自分もストレスになって一部損壊した家に帰った人もいる。子どもをずっと抱っこしてないと騒いで寝られないので、一晩中ずっと抱っこひもで抱っこして渡り廊下を歩いたという話も聞く。

・昼間は家の中でもいいが、夜寝るときは怖いから外に停めてある車の中で寝たというような経験も聞いてきた。子どもから目も手も離せないママたちがたくさんいる。

市長

・「災害時における ペットのための行動指針」というものがある。これをご覧になったことはあるか。読んでみるときちんとした内容になっているので、市民の皆さまに周知でき

るようにしていきたい。

・ペットと一緒に避難しても一緒には過ごせないだろう。避難所で離れて過ごすことは、実際には簡単なことだろうか。

【参加者H】

・私はネコを飼っているが環境が変わると大変だと思う。ただ、ネコアレルギーの方もたくさんいらっしゃるので、同じ避難所で一緒に過ごすことは100%無理だ。どうしても一緒にいたければペットが集まれるところに人間も行けばいいが、預けられる場所は確保したい。

・ペットそれぞれの性格と飼い主さんがどう考えるかだが、ばらばらになったとしても確実に安全に暮らせる場所は確保してほしいと思う。

【備蓄】

市長

・備蓄の話が共通して出ている。赤ちゃん・病気の方・障がい者の方、全てのケースに対して行政として必要十分なだけ対応できる備蓄をしておくことは可能だろうか。あるいはどこかに限界があると思うべきものか。

【参加者F】

・（自分の家族に必要な食料となるよう）塩分濃度をきちんと測って、調整していこうと思っている。38万人皆さんのために備蓄するのは無理だ。本当に困っている人に優先的に渡すか、1人1個じゃなく三つぐらいに分けて渡してもいい。

・自衛隊や市が救援物資を持ってきてくれるまで、自分たちで前もってある程度の備蓄はしたほうがいいと思う。家でも回転備蓄をしている。

・阪神・淡路大震災では、避難所へ行ったが入れないので身内で安全に過ごせるところへ避難してほしいと言われた方がいた。その方は次女のマンションに集まったが、道路に布団を引いて寝ている方が非常に多かったそうだ。

・避難所を当てにするのではなく有事になる前に、ガラスが飛散ないようにフィルムを張る、家具の固定をするなど自分の命を守る準備をしておきたい。

【参加者G】

・備蓄した食品は必ず期限が来てしまうので、食べられなくなる前に消費して合った量をストックするというローリングストックという考え方がある。BCPプランナーとして中小企業の備蓄倉庫を拝見すると、とくに食べられなくなっている食品ばかりのところもたくさんある。

・食物アレルギーをお持ちの方、病院食が必要な方、それまではミルクだった赤ちゃんが長期の避難生活で離乳食に切り替える必要があるとき、避難所に離乳食が届かない。そういうことを行政が全部やるのは大変なので、食品についても個人で必要なだけ備蓄しておく。

・セーブ・ザ・チルドレンというボランティア団体が子どもスペースをつくって子どもの相手をしてくれた。あるいは大学で保育を勉強している学生さんが、ボランティアで子どもの相手をしてくれた。お菓子の企業がたくさんおやつを届けてくれた。そうすると子どもたちのストレスも解消される。子どもがおとなしくなれば一緒にいる大人たちもストレスが減っ

て、みんなが平和に暮らせる。非常食におやつという発想はないが、備蓄をしておきたい。

- ・避難所生活が続くと温かい食べ物が食べたい。キッチンカーなどの事業者と岡崎市が協定を結んでいただきたい。

- ・トイレトレーラーを市がストックしておいて、いざというときには公共施設のトイレが足りないときに使う。他の地域で被害が発生したときに出勤させるのもいいと思う。

- ・普段から薬・眼鏡・コンタクトレンズを使っている方は、急な避難で困ってしまうので、避難袋の中に備蓄しておいていただきたいと思う。生理用品についても市のほうで考えていただきたい。

【避難所における性被害】

【参加者G】

- ・避難所が地獄であるという話に関連して、避難所における性被害が深刻だと耳にした。知らない人が布団に入ってきた、暗闇で触られた、トイレや授乳を覗かれたという話がある。大人の女性だけでなく小さな子どもも被害を受けている。女性や小さな子どもに気を付けなさい、一人で行動したあなたが悪いと言うと自己責任論になってしまう。痴漢は許さないという社会的風潮に変わってきたのと同じように、避難所における性被害を防ぐためにも、大人みんなが許さないという自治活動が必要である。

- ・避難所の中では、できるだけ雑魚寝を避けて、テントを必要な数準備して必要最低限のプライバシーをつくる、授乳室をつくる、子どもスペースをつくることは、ぜひお願いしたい。

【障がい者の方への情報保証】

【観覧者A】

- ・耳の聞こえない人が岡崎市には1,000人以上在住している。もし避難所に逃げても手話通訳者がすぐ呼べない状況で、避難所の皆さんとコミュニケーションを取ることが難しい。聞こえないだけでなく筆談のできない方もいる。飲み物・食べ物の配給のアナウンスで皆さん並んでいるが、私たちはそういう情報をつかむことができない。

- ・福祉避難所という話もあったが、そういう情報が少なく場所が分からない。避難所に行っても情報がないと支障をきたすので、そういう情報保証について考えていただきたい。例えば、プラカードのように見て分かる情報をお願いしたい。

【参加者F】

- ・訓練などでは、耳の聞こえない方に伝えることを大きく紙に書いて、小学生や中学生にお願いして避難所を回ってもらっている。各避難所でそういうことを決めていけば、皆さんが安心・安全に暮らせるのではないか。

- ・例えば、クラスごとに集めて1時間、大声を出して目いっぱい遊ばせてあげる。女性のために授乳や着替えをする部屋を確保して、本当に困っている人たちの目線で考えていく。市長さんをお願いすることも大事だが、地域みんなで不安のない避難所を作り上げることが必要である。

- ・避難所では決められたことを守っていきながら、みんなで過ごしていくためにはどうしたらいいか、全部を市に任せるのではなくて地域の人たちで話し合っていくことが一番大事だと思う。

市長

- ・障がいをお持ちの方の情報保証についてご意見はあるか

【観覧者B】

- ・私の子どもは知的障がいと身体障がいを抱えている。目もよく見えず補聴器も付けていて、ほとんど四つの障がいを持っている状態だ。そういう子どもを避難所に連れていくことはで

きない。

・親が障がい者の子どもを叱っても止めることはできない。そういう人間を放っておいていいのか考えていただきたい。

【風呂敷の活用】

【観覧者C】

・私は小さい頃から風呂敷を使ってきた。災害時に大変役に立つという話を聞いて、風呂敷相談の資格を取った。私の所属している日本風呂敷協会では、風呂敷防災ブックを発行した。風呂敷はなぜ避難所で使えるか、たくさんの方が書いてある。

・荷物をまとめる目的の他、マスクやナプキンや敷居の代わりにもなる。風呂敷を使って子どもたちといろいろな遊びができる。風呂敷の端と端を結ぶと簡単にエコバッグになる。90～120cmの綿の風呂敷が1枚あれば、いろいろなことに対応できる。避難グッズの中に一つ入れていただく、あるいは日常的に置いていただいで災害時には持っていくことを、皆さんに広めたいと思う。

・私は岡崎市のボランティア教育もしている。避難所が開設されたときの受け入れは大変だと思うので、そういったことも含めて皆さんと災害時にどんなことをしたらいいかを考えていきたいと思う。

【参加していない方への情報提供】

【観覧者D】

・皆さん非常に意識が高く生々しい素晴らしい意見を交換できたと思うが、問題は来られていない大多数の方だ。ホームページに興味を持ってどれだけの人が見に行くだろうか。ホームページをもっと楽しいものにして、それを推進するために各組長さんから回覧板なりを通してお願いするというように、情報が皆さんに伝わる工夫をしていただきたい。

・私を助けるために若い人が怪我をしたり、命を落とすようなことは私自身が後悔するので、家にとどまって全てが収まってから避難所を覗こうというつもりでいる。この家の人はどういう選択をしたのか、助けに行くべきかどうか判断できるシステムも必要だ。

5. 総括

市長

・避難所・災害防災は皆さんお一人お一人が当事者である。

・岡崎市としても分散避難を進めて、まずは自宅における防災力を強化していくが、どうしても避難所を利用しなければならない場合に安全・快適であってほしいということは、共通した願いだと思う。その上でさまざまな実体験を踏まえた貴重なご意見を頂けた。

・地域で、あるいは個々で防災力を高めるという意味で、HUG（避難所運営ゲーム）という防災ゲームがある。ただ単に楽しむためではなくて、即実践に応用できるゲームなので多くの方に体験してほしい。

・今日は市議会議員さんもお見えになっているので、これからさまざまなご示唆を頂きながら岡崎市の防災力を強化していきたい。

【司会】

・今回の内容については、後日ホームページなどで広く周知することで皆さんに市政への関心を高めていただき、より良い町づくりへと繋げていきたい。

(了)